道真の怨霊と藤原師輔

黒木　香

始めに

平安時代は怨霊の跳梁跋扈した時代であるが、数多の怨霊達の中でも一際光彩を放つのは、菅原道真の怨霊である。平安時代人が如何に怨霊を畏怖したかということについては、言を俟たないであろうが、道真が北野天神として祭祀され、その社が現在に至るまで賑わっているのは、単なる畏怖だけの然らしむる所ではないように思われる。

道真左遷の主謀者で、彼と共に大臣の位に在った時平を「悪人」と極めつけることは、古来より多くなされてきた。例えば『大鏡』時平伝には、「左大臣時平のおとゞ、延喜九年四月四日うせ給ふ。……この時平のおとゞの御女の女御もうせ給、御孫の春宮も、一男八條大將保忠卿もうせ給にきかし。……その御弟の敦忠の中納言もうせ給にき……。あさましき悪事を申をこなひたまへりし罪により、このおとゞの御末はおはせぬなり」と記す。時平一家の早逝を語りつつ、道真の祟りを強調する実に巧みな叙述と言わねばならない。しかし時平の薨じた延喜九年（九〇九）から敦忠の没年天慶六年（九四三）までは実に三十四年もあり、これを一連の出来事と捉えることは仲々困難である。にも関わらず後々まで道真の祟りが喧伝される裏には、何らかの力が介在しているのではあるまいか。

それらを私は次の四者が結びついたものと想定している。

(1) 北野天満宮の根幹たる北野寺の属した天台宗の僧侶
(2) 道真が葬られた安楽寺の僧並びに巫女
(3) 道真の子孫
(4) 藤原師輔とその子孫

但し、本稿では(4)に挙げた師輔に限定して論じたい。

（一）

道真の怨霊と藤原師輔との関わりについては、既に角田文衛氏により論述されている。(1)

菅原の怨霊が実在し、現実に道真の失脚を図った人びとに害を及ぼしたかどうかは問題ではない。重要な点は、忠平が時平の裔孫を滅ぼすためにこの浮説を公的に認め、ひそかにこれを利用しようと謀ったことである。道真の歿後二十年にしてその怨霊が更めて問題にされたのは、この時分から忠平の謀略が開始されたことを意味している。

忠平に倣って息子の師輔も、北野天満宮を大いに尊崇し、その威力によって兄・実頼の一統の絶滅を企てたのであり、これまた凄じい執念であった。(注1)菅家の怨霊には、菅原氏の人々は、殆ど関知していなかった。

時平の同母弟忠平が時平の子息の保忠や敦忠に精神的圧迫を加えるために道真の怨霊を利用し、その二男師輔も実頼一家を圧迫せんとして道真の怨霊を利用したのだ、と角田氏は言われる。

大いに首肯できる説ではあるが、私は忠平よりも師輔に注目したい。師輔が北野神社に助力を求めた際に、父忠平と道真との間には親交があったかのように思わせたのではないか。師輔が道真の呪力に期待した理由は後述することにして、まず道真が左遷された時の状況について述べておきたい。

左降事件が起きたのは昌泰四年（九〇一）一月二十五日。この時、事件の仕掛人時平を批判し得た人が何人いたであろうか。

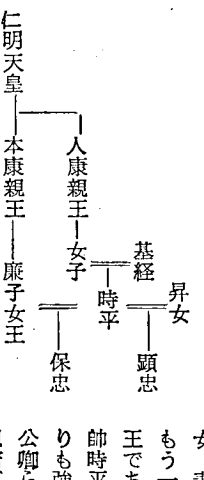
坂本太郎氏は、この事件を「藤原氏の常套手段であった他氏排斥の一つ」と捉え、藤原氏は勿論のこと「かれのために進路をふさがれている皇族出身の源光なども同調したであろうし、党争を事とする学者の間にも暗に支援するものが少なくなかったであろう」と推測されている、(注2)昌泰四年の公卿の顔ぶれは、

左大臣　藤原時平
右大臣　菅原道真
大納言　源光（道真左遷と同時に右大臣）
中納言　藤原国経・源希・藤原定国
参議　藤原有実・源貞恒・十世王・藤原有穂・源潔・藤原清経・源昇・在原友于

というものであり、内分けは藤原氏六人、源氏五人、王一人、菅原氏一人、在原氏一人となっている。

基経の女で時平の妹の穏子が生んだ保明親王が立太子するのは延喜四年（九〇四）のことであり、昌泰四年（九〇一）段階では藤原氏の政権は確乎としたものではなかった。藤原氏の総帥時平と並んで、菅原氏の道真が大臣の位に在ることは、藤原氏にとっては大きな脅威である。藤原氏の内部ではしば〳〵政権をめぐり骨肉の争いが起きるが、それは藤原氏の政権が安定しているからであり、他氏の勢力が強くなれば話は別である。時平との親疎に関わりなく、他氏勢力伸張に歯止めをかけるべく、藤原氏は一致協力態勢をとるであろう。

では源氏はどうか。この年、源氏の公卿は五人もいた。坂本氏の言われる通り、道真故に大臣就任を我慢させられていた光は、道真の存在を苦々しく感じていたことだろう。昇はその女を時平と結婚させており、婿の時平に左袒したにちがいない。他の三人の立場は明らかではないが、源氏は大体において誇り高く、諸氏出身の道真が上座にあることを好ましくは思うまい。出自から言うと、時平は源氏方には受け入れられ易い。図に示す如く、時平の母は人康親王の女、妻の一人は昇の女もう一人の妻は廉子女王である。藤原氏の総帥時平は皇族との関わりも強く、源氏出身の公卿らは彼とは割合に親密だったであろう。



年若い醍醐天皇も又、気難しく堅苦しい道真には一目置いて敬いはするものの、年齢的に近い上に容貌や才に恵まれた大らかな時平の方に親しんでおられたようである。つまり道真は四面楚歌の状況に置かれていたわけであり、彼の左遷に際してはその処置に対して批難の声もなかった。勿論、道真を高く評価しておられた宇多法皇も、急を聞いて内裏に駈けつけられたが、政事から退いていた法皇は空しく引き返すより外に術はなかった。

とはいえ、法皇と時平の仲が険悪であったわけではない。法皇が数多の御息所の中でも特に寵愛していた「京極御息所」こそは、時平の女褒子に他ならないからである。(注3) 法皇は道真の左遷を心底悲しまれたにちがいないが、さりとて寵妃の父時平を疎んじるということはなかったであろう。

以上述べてきたように、朝堂において孤絶していた道真の左遷は、彼自身が何事かを謀ろうとしたか否かに関わりなく、誰の目にも起こるべくして起きた事件であると映ったはずである。それにも関わらず、道真の左遷は彼と敵対していた時平が、己れの私怨から企てたことのように言われるようになるのは何故か。そこに何者かの存在があると思うのは自然であろう。

(二)

では、その人物を忠平と見てよいだろうか。忠平は時平の同母弟であるが、彼らの間には仲平がいる。彼ら三人を「三平」と称したと言うが仲平はおっとりした性格であったと見えて、延喜九年(九〇九)に時平が薨じて後、忠平が順調に昇進するのに対し、長らく参議のままであった。逆に見ると、忠平には兄仲平を追い越して、長兄時平の後を襲うだけの才覚と実力があったということになる。

その忠平だが、『大和物語』九十八段に、

同じ太政大臣(忠平)、左の大臣(実頼)の御母の菅原の君かくれたまひにけるとき、御服はてたまひにけるころ、亭子の帝なむ(醍醐)うちに御消息きこえ給て、いろゆるされたまひける。

とあるように、「菅原の君」と呼ばれた女性と結婚して長男実頼を儲けている。彼女は宇多天皇の皇女の源順子である。(注4)「菅原」という名称より、角田氏は、順子は道真の父是善の女類子と光孝天皇との間に生まれた女性で、宇多天皇の養女となった、と推測しておられる。(注5) しかし源順子が菅原氏と関わりのありそうな名で呼称されるのは『大和物語』においてだけであり、道真との関わりはよくわからない。もし道真と血縁関係があるのなら、彼女が時平に対して敵意を抱いていた可能性が高い。

但し彼女は実頼の母でもあった。実頼は彼女の一人子であったらしいから、言わば頼みの綱でもあるわけだ。ところが実頼は八祟られた〉時平一族の女の一人と結婚していた。

時平の薨逝した延喜九年(九〇九)には実頼は未だ九才であるから、実頼と時平の女との婚儀は時平の薨後である。二人の間には敦敏・頼忠・斉敏・慶子・述子が生まれている。長男敦敏の誕生は延喜二十年(九二〇)と推されるので、実頼の結婚は延喜十九年以前のことになる。妻の時平の女は承平四年(九三四)一月に没するが、(注7) その前年に述子が誕生しており、実頼と時平の女との仲は、彼女が亡くなるその時まで大変睦まじいものであったと思われる。

一方実頼の母順子は、延長三年(九二五)四月四日に薨じているから、息子の結婚も孫の誕生も我が眼で見たわけである。もし彼女

が菅原家と関わりを持っていたとしても、我が子の幸福を希い、孫達に幸多かれと思うのが人情である。ということは、順子は実頼と時平の女とが結婚することに何の危惧も懐いていなかったということである。まだ道真の怨霊についての噂は出ておらず、時平家と結びつくことによって何の不利益も蒙らなかったということになる。

時平の家が道真の怨霊によって祟られているという噂が出るためには、道真の祟りを人々に確信させるに足る事件が連続して起きる必要がある。延喜九年（九〇九）の時平の死に続いては、

九二二（延喜二十二年）保明親王薨
九二五（延長三年）　慶頼王薨
九三〇（〃　八年）　清涼殿落雷
　　醍醐天皇崩御

という事件が起きている。二人の皇太子、保明親王とその息子慶頼王の薨逝は、世人にとって甚だ衝撃的な出来事であったはずである。この機に疑心暗鬼に陥っている人心の動乱を狙うことは、忠平にはた易いことである。

しかし醍醐天皇の皇太子保明親王の所には、忠平の女貴子も入内していた。彼女には皇子が生まれていない。保明の薨後皇太子となった、保明と時平の女仁善子との間に誕生した慶頼王が薨じて、時平方が外戚になることは防がれたが、だからと言って忠平の立場が格別有利になったのではない。もし保明親王に先んじて慶頼王が薨じたのであれば、忠平の策略は効を奏するだろうが、肝心の保明が亡くなってしまったのでは、道真の怨霊を登場させても仕方がない。

その上、時平の女と忠平の長男実頼との間には、敦敏・頼忠が生まれている。道真の祟りが口の端に上れば、時平の血を承けた孫達の将来にも翳がさす。祖父の忠平が自らそれを望んだとは考えにくい。従って、忠平が道真の怨霊の存在を認めるような行動をする可能性は少ない、と思われる。

（三）

忠平が道真の怨霊の活躍と何ら関わらないであろうことを述べた。一方忠平と道真の間に親交があったことは説話に見えている。例えば『十訓抄』第六・二三話には、次のように記されている。これは真実であろうか。

……貞信公は、時平の御おとゝにはおはしけれども、このかみに同意したまはず、ことに天神の御事をなげき給ひけり。其ゆへに、（清涼殿落雷の時）當座におはしましけれども、聊のわづらひなし。かゝればにや、正暦三年二月四日御詫宣には、「我西行のとき、故貞信公は右大弁にて、ふかく我遠行をなげきて更に兄大臣の謀計に同ぜざりき。たがひに消息の状をかよはして、つゐに懇懃をむすびき。彼家の子孫たえずしておほく朝家にみてり。我ため志あらん輩、なんぞ守護せざらんや」とのせられたり。

忠平が延長八年（九三〇）の清涼殿落雷の折、内裏に居りながら無傷であったのも、彼の子孫が相次いで摂関の位につくのも、全て忠平が道真に味方した故であるという。しかし道真が左遷された時、彼は右大弁・従四位下であった。坂本氏は、このように低い官位にある忠平が兄時平に抗ってまで道真側につくことはできないだろうと言われているが、(注8)その通りであろう。

それに時平は自己の野望のために道真を左降したのではなかった。藤原氏の勢力を保持するために妹穏子を皇后に冊立し、その所生の皇子を次期皇太子にする必要があった。そのためには諸氏出身の大臣、道真の排斥がどうしても必要となる。道義的には賛成しかねるとしても、同じ藤原氏に属する忠平には時平に反対する理由がない。とすれば、『十訓抄』が語る道真と忠平との親交は、後からの付会と考えられる。

それは『十訓抄』に引用される「正暦三年二月二日御詫宣」が下った時になされたと思われる。この託宣文は『天満宮託宣記』に収載されるが、それには、

……我か西行の時に。故貞信公は右大辨にて。深く我か遺行を歎て。更に兄の大臣の謀計に不レ同き。遐に消息状を通て。専無二隔心一き。彼卿と我と遂慇懃を結ひき。彼家の子孫は攝政不レ斷て。多く朝家に滿たり。故入道攝政の北野社に被レ過たりし。甚所レ悦なり。

とある。道真没後百年近い歳月を経た一条朝になって、忠平と道真との親交が託宣に持ち出されたことは解せない。もし忠平が道真の怨霊の呪力によって、時平の息子たちを縛ろうとしたのならば、彼は生前にそのことを口にしていたはずである。何も正暦三年（九九二）になって仰々しく述べられる話題ではないはずである。

実はこの頃までに、北野神社と摂関家は強く結びついていたのである。正暦四年（九九三）には内大臣道兼が兄の関白道隆に、道真への太政大臣贈位のことを諮っているが、(注10)彼らは道真の「甚所レ悦」の「故入道攝政」兼家の息子である。つまり正暦三年の託宣のこの部分は、摂関家隆盛の正当性を強調しているのである。恐らくは摂関家の要請により挿入されたものであろう。

では北野神社と摂関家が結びついたのは何時か。それは天徳三年（九五九）に師輔が北野神社に祭文を捧げ、社殿を増築した時である。北野社の造営について記した『最鎮記文』には、(注11)

天徳三年。九條右大臣殿造二増屋舍一。奉レ供二寶物一。

とある。

（四）

師輔が北野神社に祭文を捧げた天徳三年（九五九）には、彼は右大臣。左大臣は兄実頼である。翌年には師輔は薨じているから、彼は我と我が眼で子孫の繁栄を見ることはできなかったわけである。

天暦二年（九四八）には彼の女安子と村上天皇との間に、後の冷泉天皇が誕生し、同七年（九五三）に立太子しているが、師輔は兄を越えることができなかった。春宮の祖父でありながら、一の人となり得ぬとは何という屈辱であろう。

父忠平の場合には、その兄時平は既に薨じていたから、我が流の勢いを強めるためには、兄の息子たちの行く手を妨むだけでよかった。保忠や顕忠、敦忠がいくら醍醐天皇や穏子の強力な後楯を持つとはいえ、政治の表も裏も知り尽くしている忠平の敵ではない。彼らは有能ではあったが、父時平の如く押しの強い政治向きの人間ではなかった。和歌や管絃等の芸術方面で、優れた才能を花開かせた人間であり、権謀術数とは無縁の存在であった。それ故、我が子の昇進の遅れを気にしていた忠平も、自分さえいれば、物静かな時平の息子たちの存在は恐るるに足りないものであることを知っていた。

ところが師輔の場合は違う。兄実頼は健在である。しかも兄は国家の柱石としても恥しくない器であり、政治の面は勿論、学芸の面

でも秀れた才能を発揮した。ここで両人の昇進過程を比較してみることにしよう。

	実頼	師輔
九〇〇（昌泰　三年）	誕生	
九〇八（延喜　八年）		誕生
九一五（〃　十五年）	元服・従五下	
九二三（延長　元年）		元服・従五下
九二八（〃　六年）	右大将・従四下	
九三一（〃　九年）	参議	
九三二（承平　二年）	従四上	右少将
九三四（〃　四年）	中納言・従三	正五下
九三五（〃　五年）		従四下
九三八（〃　八年）		参議
九三九（天慶　二年）	大納言	権中納言・従三
九四三（〃　六年）	正三	大納言
九四四（〃　七年）	右大臣	
九四五（〃　八年）	左大将	右大将
九四六（〃　九年）	従二	従二
九四七（天暦　元年）	左大臣	右大臣
九五四（〃　八年）	正二	
九五五（〃　九年）		正二

見る通り、大納言任官の頃から、二人は足並みを揃えるようにして大臣に至っている。嫡男である実頼の方が常に上位にあり、師輔は終生兄を越えることなく終った。『栄花物語』は実頼が左大臣、皇太子の外祖父であり、実権を握る師輔が右大臣であることを評して、「一くるしき二」と言っているが、実頼はその息頼忠のように有名無実の大臣ではなく、弟から政治的に圧迫されることはなかったと考えられる。(注12)

実頼はともかく、「くるしき」人と思われておりながら、一の人になれない師輔の焦慮はいかばかりであったろう。本来なら皇太子の祖父たる自分が、兄の上位にあるべきだという思いがあったはずである。師輔は人格円満な人物の代表者のように言われることが多いが、彼が憎悪の感情から自由であったとは思われない。

彼は父忠平の教えをまとめた『九暦記』の冒頭に、忠平がその父基経から「我嗣在汝所者」と繰り返し言われた話を記している。基経は忠平が元服する以前に薨じており、彼が時平よりも忠平に多く期待するところがあったかどうかは不明であるが、恐らくはこの話は忠平自身が作ったか或いは師輔が作ったものであろう。いずれにしろ師輔には、忠平が基経から嗣子と認められたことを記すことで自分も忠平から嗣子と認められた人間であることを暗に示すという意図があった。忠平の嗣子たる自分が、名実ともに摂関家の主流になるべきだという思いがあったのであろう。

その上、実頼の子と師輔の子は同じペースで昇進している。実頼の長男敦敏は、周囲の期待にも関わらず、天暦元年（九四七）に二六才で夭逝しているから、二男頼忠と師輔の長男伊尹の昇進を比較してみる。

	頼忠	伊尹
九二四（延長二年）	誕生	誕生
九四一（天慶四年）	1/7 従五下	2/7 従五下

九四二（天慶五年）						12/13 侍従	12/27 侍従
九四三（〃 六年）					9/16 右兵衛佐		3/7 右兵衛佐
九四六（〃 九年）				1/7 従五上			1/7 従五上
九四八（天暦二年）			1/30 右少将				1/30 左少将
九五五（〃 九年）		2/7 従四下					1/7 従四下
	7/24 右権中将						7/27 左権中将
九六〇（天徳四年）	1/7 従四上						1/7 従四上

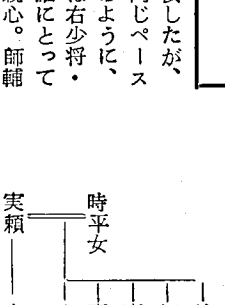
師輔の薨じた天徳四年（九六〇）五月以前の官位を比較したが、見てわかるように、頼忠と伊尹は同じ年に誕生し、全く同じペースで従四位上・権中将に至っている。頼忠の兄敦敏は前述のように、天暦元年（九四七）に早逝するが、天慶九年（九四六）には右少将・従五位上になっていた。兄弟の子が並んで昇進すれば、誰にとっても憂慮の因となる。何とかして我が子を……と希うのが親心。師輔の死後伊尹はすぐさま参議に任じ、頼忠を大きく引き離すことになるのだが、神ならぬ師輔にわかるはずもない。栄華の階に足をかけながら、兄実頼の風下に立たねばならぬ彼は、焦ら立ちと憤りとで気も狂わんばかりになったのではないか。そして次のような祭文を北野神社に奉ったのである。

……因レ茲に師輔、力を竭し誠を至て奉レ禱こと無レ極。夜の守日の守に守幸へ給て。男女の子孫品々に。男をは國家の棟梁として。萬機の攝録を意に任せ。及太子の祖と成し。女をは國母皇后帝王の母たる我か姓藤原の氏と千世之世に名を傳へ。萬孫之家に跡を繼て。……(注13)

息子を摂政関白に、女を国母に、と師輔の子孫繁栄の祈りの言葉は激しい。ここに実頼の家に負けまいとする、彼の心情が窺える。

（五）

師輔が数ある神社の中から、まださして大きくもない北野神社を選んだ理由は、角田氏が指摘されたように、(注14)師輔の家は、北野神社の祭神菅原道真を左遷の憂き目に遭わせた時平の家と、直接の関わりを持たないからであろう。それに対し、兄実頼は時平の女を妻にしており、本院家とは極めて密接な繋りを持っている。彼の子女は次図の通りである。



時平の長男保忠は母方の所領八条に居り（祖父は八条宮本康親王）、二男顕忠は富小路に居た。三男敦忠は枇杷中納言とも本院中納言とも称されるが、それは彼が父の所領本院を本邸とし、枇杷殿と呼ばれた叔父仲平の女明子と結婚していたからである。彼の母は国経北の方として有名な在原棟梁女であるが、彼女は元の夫国経の邸から、時平の住む本院に連れて来られ、時平と共に住んでいたのであろう。

実頼の女慶子は「本院女御」と呼ばれており、彼女が本院と深い関わりを持つことがわかる。従って彼女の母の時平女は、在原棟梁女の女であろうと推測され、敦忠の同母妹であると考えられる。彼女は承平三年（九三三）に没するが、実頼との間に生まれた子どもたちは、母の家である本院で養育されたであろう。

実頼の二男頼忠は、『公卿補任』応和三年（九六三）の条の分注に「右大将保忠卿為子」とあるように、伯父保忠の養子になってい

た。角田氏は、頼忠が保忠の養子となったのは保忠の死後であろうと推測される。しかし嗣子に恵まれない保忠が弟敦忠の邸で養育されている甥のうち二番目の頼忠を養子に迎えた、と考えてよいのではないか。それは保忠が亡くなる承平六年（九三六）以前のことであり、頼忠が一二才に達する以前のことであろう。

頼忠は時平の孫であるという点は勿論、時平の嫡男保忠の養子であるという点で、本院家の血を濃く承け継いでいたのである。保忠が承平六年（九三六）に、敦忠が天慶六年（九四三）に逝去して、時平一族の没落が明確になった後に、時平の家は道真の祟りにより滅亡すべき運命にあるのだという風聞が立てば、道真の怨霊の標的になるのは、時平の二男顕忠ではなく、頼忠である可能性が強い。時平の直系たるべき者は頼忠だからである。

保忠は「賢人大将」と称される如く、思慮深く、特に管絃の才に恵まれた。醍醐天皇の召しによって笙を奏し、その素晴しさに感銘を受けた天皇から笙を賜った程である。(注15)弟敦忠も又管絃の才を持ち、同時に三十六歌仙の一人に数えられる程の歌才も有していた。その他、時平の孫には「博雅三位」として名高い源博雅がいる。このように音楽や歌に秀れた才を発揮した人物を生み出した時平の家には、それにふさわしい雅やかな雰囲気が漂っていたことであろう。その中で幼年時代を過ごした実頼の子どもたちにも、管絃や歌の才が伝えられたはずである。そして彼らの父実頼は学才や秀れた政治的手腕を持っていた。母方と父方とから、秀れた要因を受け継いだ敦敏や頼忠が、凡愚ではなかったことは容易に想像がつく。実際、頼忠の子で三舟の才を謳われた公任、斉敏の子で実頼の養子となった実資等、優秀な孫が生まれているのは、実頼だけの功績ではなく、時平家の好ましい環境によるところも大きいと思われる。

実頼の子が無能でないことが明らかになるにつれ、師輔の懊悩は深まる。彼は大変な子煩悩であったから、兄の子どもたちが我が子の将来にとって看過できない存在となることを人一倍恐れたにちがいない。

天慶四年（九四一）には実頼の長女慶子が朱雀天皇の女御となるが、彼女は皇子に恵まれなかった。世継のない朱雀天皇の後を承け、弟の村上天皇が即位すると、師輔の女安子と実頼の女述子とが競い合うこととなった。師輔の実頼に対する憎しみは一層つのったにちがいない。

ところが、天暦元年（九四七）以後実頼の家は連続した不幸に見舞われるのである。まず天暦元年五月二十一日に源高明の室となっていた二女（母が時平女か否かは不明）が死亡、入内後一年も経たぬ述子が十月五日に死亡、十一月十七日には長男敦敏が死亡する。わずか半年のうちに三人の子どもが没している。『貞信公記抄』の天暦二年（九四八）二月十九日の条の、実頼の私記には、

去年數子亡逝、有所恥思久不參入、

と記されている。連続して三人の子を失うという不幸に遭った実頼は、あまりのことに家に引き籠っていたらしい。

天暦三年（九四九）八月、長い間権力の頂点に在った実頼と師輔の父忠平が薨じた。左右両大臣の反目をしっかりと防いでいた大きな壁が消えたわけである。実頼と師輔とは母親を異にしているから、父が亡くなれば両人を繋ぐものは何もない。

さて天暦五年（九五一）になると、実頼の長女慶子が薨逝する。二、三年のうちに実頼は四人の子を亡くしたことになる。まるで何

かに祟られでもしたかのように。残った二人の息子のうち、斉敏は天徳三年（九五九）正月には病のため中将を辞している。天徳二年頃から健康を害していたらしいが、元来あまり健康ではなかったのだろう。つまり実頼の家では、頼忠一人が父の期待を担うこととなったのである。

一方師輔方では、天暦二年（九四八）に安子が皇子を生み、同七年（九五三）に皇子は立太子した。たゞ相変わらず、師輔が兄の下位にあったことは先述した。敵対する兄の家は不幸続き、それに対して我が家は前途洋々であるはずなのに、事はうまく運ばない。両家の明暗が際立ってくるに従い、逆に焦慮はつのる。その時師輔は北野神社の増築を決意する。北野神社に祀られる道真に加護を求めると同時に、その呪力を再び世間に持ち出すことを狙ったのである。時平や保忠・敦忠が亡くなり、道真の怨霊の恐怖は世人から忘れられようとする頃であったが、師輔は道真の祟りと実頼の子どもたちの相次ぐ早逝とを結びつけようとしたのであった。

実頼が我が子の早逝に心胆を傷めたことは、世人の知るところである。当時は母系中心の社会であるから、母の出自は人々の注目するところであり、実頼の子らの死は、時平の孫の死と考えられたはずである、不幸続きの実頼に同情する人々の心に、まさか道真の祟りでは、という疑惑が生まれるのも当然であった。

そこを師輔はねらったのである。自分の子の将来を脅かす危険のある実頼の子のうち、頼忠と斉敏はまだ在世していた。病身の斉敏はともかく、頼忠の存在は気になる。彼は実頼の二男であるが、敦敏亡き後実質上の嫡男であって、同時に摂関家の直系たる保忠の養子でもある。摂関家を継ぐ者としての正当性を主張できる立場にあるのである。だが、道真の祟りを受ける可能性も最も強い。その点を利用して、師輔は堂々と北野神社を援助したとみてよいだろう。彼が道真の呪力を本心より信じていたか否かは不明である。しかしながら、道真にすがる程、師輔が心情的に追いつめられていたのは確かであろう。

終わりに

平安時代は怨霊の存在が深く信じられた時代であるから、怨霊の力を利用することで人々の心を動かすことは比較的容易である。師輔が北野神社を増築すれば、当然衆目は道真に集まる。この頃には道真の怨霊の存在は忘れられつつあったであろうが、それが再び蒸し返された時、実頼の子らの連続した早逝は何やら不吉なものに思われてくる。そして人々の注意は、時平の嫡男保忠の養子頼忠の上に注がれる。

師輔は、頼忠自身が次は己れの番かと怖れることも意図していただろうし、実頼の家が祟られた家系であることを人々に印象づけることも意図していたはずである。それは逆に、彼の家は道真の怨霊の祟りを受けないことを明らかにし、彼の家こそが正当な摂関家の流れを汲むことを人々に知らせることに繋がったのである。

〔注1〕「菅原道真と北野神社」（『王朝史の軌跡』学燈社・昭和58年3月）

〔注2〕『菅原道真』（吉川弘文館・昭和37年11月）

〔注3〕『大和物語』六十一段に「亭子の院に宮すん所たちあまた御曹司してすみ給に、としごろありて、河原の院のいとおもし

ろくつくられたりけるに、京極の宮すむどころひとところの御曹司をのみしてわたらせ給ひにけり」とある。

〔注4〕『大鏡』裏書には「傾子」、『日本紀略』の傍書には「欣子」とある。

〔注5〕注1に同じ。「藤原忠平の栄達」（『紫式部とその時代』角川書店・昭和41年5月）にも。

〔注6〕『貞信公記抄』延喜二十年二月五日の条に、実頼の子が誕生したという記事が見えている。

〔注7〕『日本紀略』。

〔注8〕注2に同じ。

〔注9〕『群書類従』巻二〇。表記を一部改めてある。

〔注10〕『小右記』正暦四年閏十月六日の条。

〔注11〕『群書類従』巻二〇。表記を一部改めてある。

〔注12〕実頼と師輔の間の確執については、小山敦子氏『源氏物語の研究』（武蔵野書院・昭和50年3月）に詳しい。

〔注13〕注11に同じ。

〔注14〕注5に同じ。「師輔なる人物」（『平安の春』朝日新聞社・昭和58年4月）にも。

〔注15〕『醍醐天皇御記』延喜五年二月二十二日の条。

〔付記〕本稿をなすにあたり、終始御指導を賜った稲賀敬二先生に厚く御礼申し上げます。

――広島大学大学院博士課程後期在学――